

東京書籍。精選国語総合・古典編。国総026

目次

いま御覧になっている教科書の古文漢文の現代語訳すべてを見ることができるパスワードを差し上げます。
「もとのページ」に書いてある、「DVDビデオ文法など+SNS古文オールインワン」＝合計 1500 円の購入者に。

古文編

説話

児のそら寝

検非違使忠明

絵仏師良秀

徒然草

つれづれなるままに

高名の木登り

奥山に、猫またといふものありて

同じ心ならん人と
花は盛りに

竹取物語
なよたけのかぐや姫
天の羽衣

伊勢物語
芥川
東下り
筒井筒

万葉集
古今和歌集
新古今和歌集

平家物語
木曾の最期
[参考] 祇園精舎

土佐日記

馬のはなむけ

帰京

奥の細道

漂泊の思ひ

平泉

立石寺

大垣

漢文編

訓点

再読文字

故事

矛盾

推敲

借虎威

唐詩

登鶴鵲樓

絕句

雜詩

江雪

涼州詩

黃鶴樓送孟浩然之廣陵

送友人

旅夜書懷

雜說

臥薪嘗膽

鷄鳴狗盜

論語

孟子

本 文	現 代 語 訳
<p data-bbox="607 320 768 352">児のそら寝</p> <p data-bbox="349 416 1025 544">これも今は昔、比叡の山に児ありけり。僧たち、宵のつれづれに、「いざ、かいもちひせん。」と言ひけるを、この児、心寄せに聞きけり。</p> <p data-bbox="349 560 1025 735">さりとて、し出ださんを待ちて寝ざらんも、わろかりなんと思ひて、片方に寄りて、寝たるよしにて、出で来るを待ちけるに、すでにし出だしたるさまにて、ひしめき合ひたり。</p>	<p data-bbox="1086 416 1888 544">今では昔の事となったが、比叡の山に児がいた。僧たちが宵の手持ちぶさたに、「さあ、ぼた餅を作ろう。」と言ったのを、この児は期待して聞いた。</p> <p data-bbox="1086 560 1888 847">そうかといって、でき上がるのを待つて寝ないでいるようなのも、具合が悪いだらうと思って、(児は)部屋の片隅に寄って、寝たふりをして、(ぼた餅が)できてくるのを待つていたところ、もうでき上がった様子で、(僧たちは)集ってざわついている。</p>

本文	現代語訳
<p>この児、さだめておどろかさんずらんと、待ちゐたるに、僧の、「もの申し候はん。おどろかせたまへ。」と言ふを、うれしとは思へども、ただ一度にいらへんも、待ちけるかともぞ思ふとて、いま一声呼ばれて、いらへんと、念じて寝たるほどに、「や、な起こしたてまつりそ。をさなき人は寝入りたまひにけり。」と言ふ声のしければ、あなわびしと思ひて、いま一度起こせかすと、思ひ寝に聞けば、ひしひしとただ食ひに食ふ音のしければ、ずちなくて、無期ののちに、「えい。」といらへたりければ、僧たち笑ふことかぎりなし。</p>	<p>この児は、「きっと（誰かが私を）起こすだろう」と待っていると、ある僧が、「もしもし、起きてください。」と言うのを、うれしいとは思ふけれども、ただ一度で返事をするようなのも、「待っていたのかと（僧たちが）思うといけない」と考えて、もう一度呼ばれてから返事をしようと、がまんして寝ているうちに、「おい、お起こしするな。幼い人は眠ってしまわれた。」と言う声があったので、（児は）ああこまったと思って、もう一度起こしてくれよ、と思いながら横になって聞いていると、むしゃむしゃと盛んに食べる音がしたので、（児は）どうしようもなく、ずいぶん時間がたってから、「はい。」と返事をしたので、僧たちは笑いがとまらなかった。</p>

本 文	現 代 語 訳
<p data-bbox="589 308 784 339">検非違使忠明</p> <p data-bbox="331 403 1041 922">今は昔、忠明といふ検非違使ありけり。若男にてありける時、清水の橋殿にて京童部といさかひをしけり。京童部、刀を抜きて、忠明を立てこめて殺さんとしければ、忠明も太刀を抜きて、御堂の方ざまに逃ぐるに、御堂の東のつまに、京童部あまた立ちて向かひければ、その傍にえ逃げずして、葎のもとのありけるを取りて、脇に挟みて前の谷へ躍り落つるに、葎のもとに風しぶかれて、谷底に、鳥のあるやうに、やうやく落ち入りにければ、それより逃げて去にけり。京童部、谷を見おろして、あさましがりてなむ立ち並みて見ける。</p> <p data-bbox="331 938 1041 1066">忠明、京童部の刀を抜きて立ち向かひける時、御堂の方に向きて、「観音、助け給へ」と申しければ、ひとへにこれその故なりとなむ思ひける。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>忠明が語りけるを聞き継ぎて、かく語り伝へたるとや。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p data-bbox="622 320 786 352">絵仏師良秀</p> <p data-bbox="331 405 1077 679">これも今は昔、絵仏師良秀といふありけり。家の隣より、火出で来て、風おしおほひて、せめければ、逃げ出でて、大路へ出でにけり。人の書かする仏もおはしけり。また、衣着ぬ妻子なども、さながら内にありけり。それも知らず、ただ逃げ出でたるをことにして、向かひのつらに立てり。</p> <p data-bbox="331 743 1077 1018">見れば、既に我が家に移りて、煙・炎、くゆりけるまで、おほかた、向かひのつらに立ちて眺めければ、「あさましきこと。」とて、人ども来とぶらひけれど、騒がず。「いかに。」と、人言ひければ、向かひに立ちて、家の焼くるを見て、うちうなづきて、時々笑ひけり。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>「あはれ、しつるせうとくかな。年ごろは、わろく書きけるものかな。」と言ふときに、とぶらひに来たる者ども、「こはいかに、かくては立ち給へるぞ。あさましきことかな。物のつきたまへるか。」と言ひければ、「なんでふ物のつくべきぞ。年ごろ、不動尊の火炎をあしく書きけるなり。今見れば、かうこそ燃えけれと、心得つるなり。</p> <p>これこそ、せうとくよ。この道を立てて世にあらんには、仏だによく書き奉らば、百千の家も出で来なん。わたうたちこそ、させる能もおはせねば、物をも 惜しみたまへ。」と言ひて、あざ笑ひてこそ立てりけれ。</p> <p>その後にや、良秀がよぢり不動とて、今に、人々、めで合へり。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p data-bbox="539 320 831 352">つれづれなるままに</p> <p data-bbox="349 432 1032 587">つれづれなるままに、日暮らし、硯に向ひて、 心に移りゆくよしなし事を、そこはかたなく書 きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p data-bbox="555 308 779 343">高名の木のぼり</p> <p data-bbox="331 403 1041 774">高名の木のぼりといひしをのこ、人をおきてて、高き木にのぼせて、梢を切らせしに、いと危く見えしほどはいふ事もなくて、下るる時に、軒長ばかりになりて、「過ちすな。心して下りよ」と、言葉をかけ侍りしを、「かばかりになりては、飛びおるるともおりなん。如何にかくいふぞ」と申し侍りしかば、「その事に候ふ。目くるめき、枝危きほどは、己れが恐れ侍れば、申さず。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>過ちは、易き所になりて、必ず仕る事に候ふ」といふ。あやしき下臆なれども聖人の誠めにかなへり。鞠も、難き所蹴出だしてのち、やふすく思へば、必ず落つと侍るやらん。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p data-bbox="427 308 909 341">奥山に、猫またといふものありて</p> <p data-bbox="331 403 1039 967">「奥山に、猫またといふものありて、人をくらふなる」と人のいひけるに、「山ならねども、これらにも猫のへあがりて、猫またになりて、人との事はあなるものを」といふ者ありけるを、何阿弥陀仏とかや、連歌しける法師の、行願寺の辺にありけるが聞きて、一人歩かん身は、心すべきことにこそと思ひける頃しも、或所にて、夜更くるまで連歌して、ただ一人帰りけるに、小川の端にて、音に聞きし猫また、あやまたず足もとへふと寄り来て、やがて搔きつくままに、頸のほどを食はんとす。肝心も失せて防がんとするに力もなく、足も立たず、小川へころび入りて、</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>「助けよや、猫また、よやよや」 と叫べば、家々より、松どもともして、走りより て見れば、このわたりに見しれる僧なり。「こは 如何に」とて、川の中より抱きおこしたれば、連 歌の賭物とりて、扇、小箱など、懐に持たりける も、水に入りぬ。希有にして助かりたるさまにて、 はふはふ家に入りけり。</p> <p>飼ひける犬の、暗けれど主を知りて、飛び付きた りけるとぞ。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p data-bbox="555 308 813 343">同じ心ならん人と</p> <p data-bbox="331 403 1043 774">同じ心ならん人と、しめやかに物語して、をか しきことも、世のはかなき事も、うらなく言ひ慰 まんこそ嬉しかるべきに、さる人あるまじければ、 つゆたがはざらんと対ひみたらんは、独りある心 ちやせん。互に言はんほどの事をば、「げに」と 聞かひあるものから、いささかたがふ所もあら ん人こそ、「われはさやは思ふ」など、あらずひ にくみ、</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>「さるからさぞ」ともうち語らはば、つれづれ慰 まめと思へど、げには、少しかこつかた、われと ひとしからざらん人は、大方のよしなしごと言は んほどこそあらめ、まめやか心の友には、遙か に隔たる所のありぬべきぞわびしきや。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p data-bbox="586 256 752 292">花は盛りに</p> <p data-bbox="331 355 1043 823">花は盛りに、月はくまなきをのみ見るものかは。 にむかひて月をこひ、たれこめて春の行衛知らぬ も、なほあはれに情深し。咲きぬべきほどの梢、 りしをれたる庭などこそ見所多けれ。歌の言葉が きにも、「花見にまかれりけるに、はやく散り過ぎ にければ」とも、「さはる事有りてまからで」など も書けるは、「花を見て」といへるに劣れる事かは。 花の散り、月の傾くをしたふ習はさる事なれど、 ことにかたくななる人ぞ、「此の枝かの枝散りにけ り。今は見所なし」などはいふめる。</p> <p data-bbox="331 887 1025 967">萬の事も、始終こそをかしけれ。男女の情も、 ひとへに逢ひ見るをばいふものかは。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>逢はでやみにし憂さを思ひ、あだなる契をかこち、 長き夜をひとり明かし、遠き雲井をおもひやり、 浅茅が宿に昔を忍ぶこそ、色好むとは言はめ。 望月のくまなきを千里の外まで眺めたるよりも、 暁ちかくなりて待ち出でたるが、いと心ぶかう、 青みたるやうにて、深き山の杉の梢にみえたる木 の間の影、うちしぐれたるむら雲がくれのほど、 またなくあはれなり。椎柴、しらがしなどのぬれ たるやうなる葉の上にきらめきたるこそ、身にし みて、心あらん友もがなと、都戀しう覺ゆれ。</p> <p>すべて、月花をば、さのみ目にて見るものかは。 春は家を立ちさらでも、月の夜は閨のうちながら も思へるこそ、いとたのもしうをかしけれ。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>よき人は、ひとへに好けるさまにもみえず、興ずるさまもなほざりなり。かたみなかの人こそ、色こく萬はもて興ずれ。花の本にはねぢよりたちより、あからめもせずまもりて、酒のみ連歌して、はては、おほきなる枝、心なく折り取りぬ。</p> <p>泉には手足さしひたして、雪にはおりたちて跡つけなど、萬の物、よそながら見る事なし。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p data-bbox="510 212 797 292">竹取物語 なよたけのかぐや姫</p> <p data-bbox="349 355 1030 823">今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、さかきの造となむいひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。翁、言ふやう、「わが、朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて、知りぬ。子になりたまふべき人なめり。」とて、手にうち入れて、家へ持ちて来ぬ。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>妻の姫に預けて養はず。うつくしきこと限りなし。いと幼ければ、籠に入れて養ふ。</p> <p>竹取の翁、竹を取るに、この子を見つけてのちに竹取るに、節を隔てて、よごとに黄金ある竹を見付くこと、重なりぬ。かくて、翁、やうやう豊かになりゆく。</p> <p>この児、養ふほどに、すくすくと大きになりまざる。三月ばかりになるほどに、よきほどなる人になりぬれば、髪上げなどさうして、髪上げさせ、裳着す。帳のうちよりも出ださず、いつき養ふ。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>この児のかたち けうらなること世になく、屋のうちは暗き所なく 光満ちたり。翁、心地あしく、苦しきときも、この子を見れば、苦しきこともやみぬ。腹立たしきことも慰みけり。</p> <p>翁、竹を取ることに久しくなりぬ。勢ひ猛の者になりけり。この子いと大きになりぬれば、名を、三室戸齋部の秋田を呼びて、付けさす。秋田、なよ竹のかぐや姫と付けつ。</p> <p>(追加)</p> <p>このほど三日うちあげ遊ぶ。よろづの遊びをぞしける。男はうけきはらず呼び集へて、いとかしこく遊ぶ。世界の男、あてなるもいやしきも、いかでこのかぐや姫を、得てしがな、見てしがな と、音に聞き、めでて惑ふ。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p data-bbox="622 212 752 244">天の羽衣</p> <p data-bbox="331 308 1043 679">天人の中に持たせたる箱あり。天の羽衣入れり。またあるは、不死の薬入れり。一人の天人言ふ、「壺なる御薬奉れ。きたなき所のもの聞こしめしたれば、御心地あしからむものぞ。」とて、持て寄りたれば、いささかなめ給ひて、少し形見とて、脱ぎ置く衣に包まむとすれば、ある天人包ませず。御衣を取りいでて着せむとす。そのときに、かぐや姫、「しばし待て。」と言ふ。</p> <p data-bbox="331 743 1043 971">そのときに、かぐや姫、「しばし待て。」と言ふ。「衣着せつる人は、心異になるなりといふ。ものひとこと言ひ置くべきことありけり。」と言ひて、文書く。天人、「遅し。」と、心もとながり給ふ。かぐや姫、「もの知らぬことな宣ひそ。」とて、</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>いみじく静かに、おほやけに御文奉り給ふ。あわてぬさまなり。</p> <p>「かく、あまたの人を賜ひてとどめさせ給へど、許さぬ迎へまうで来て、とり率てまかりぬれば、くちをしく悲しきこと。宮仕へつかうまつらずなりぬるも、かくわづらはしき身にて侍れば。心得ずおぼしめされつらめども。心強く承らずなりにしこと、なめげなるものにおぼしめしとどめられぬるなむ、心にとまり侍りぬる。」とて、</p> <p>今はとて天の羽衣着るをりぞ 君をあはれと思ひいでける</p> <p>とて、壺の薬添へて、頭中将呼び寄せて、奉らす。</p> <p>中将に、天人取りて伝ふ。中将取りつれば、ふと天の羽衣うち着せ奉りつれば、翁を、いとほしく、かなしと思しつることも失せぬ。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>この衣着つる人は、もの思ひなくなりければ、車に乗りて、百人ばかり天人具して、昇りぬ。その後、翁、姫、血の涙を流してまどへど、かひなし。あの書きおきし文を読み聞かせけれど、「なにせむにか命も惜しからむ。たがためにか。何事も用もなしとて、薬も食はず、やがて起きもあがらで病みふせり。</p> <p>中将、人々引き具して帰り参りて、かぐや姫をえ戦ひとめずなりぬること、こまごまと奏す。薬の壺に御文そへ、参らす。広げて御覧じて、いといたくあはれがらせ給ひて、物も聞こし召さず、御遊びなどもなかりけり。大臣、上達部を召して、「いつれの山か天に近き凶と問はせ給ふに、ある人奏す、「駿河国にあるなる山なむ、この都も近く、天も近く侍る。」と奏す。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>これを聞かせ給ひて、 逢ふこともなみだにうかぶ我が身には 死なぬ薬も何にかはせむ</p> <p>かの奉る不死の薬に、また壺具して、御使ひに 賜はず。勅使には、つきのいはかさといふ人を召 して、駿河国にあなる山の頂にもてつくべきよし 仰せ給ふ。嶺にてすべきやう教へさせ給ふ。御文、 不死の薬の壺ならべて、火を付けて燃やすべきよ し仰せたまふ。そのよし承りて、つはものどもあ よた具して山へ登りけるよりなむ、その山をふじ の山とは名づけける。その煙いまだ雲の中へ立ち のぼる、とぞ言ひ伝へたる。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p data-bbox="607 272 734 355">伊勢物語 芥川</p> <p data-bbox="331 416 1043 595">昔、男ありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗み出でて、いと暗きに来けり。芥川といふ川を率て行きければ、草の上に置きたりける露を、</p> <p data-bbox="331 608 1043 834">「かれは何ぞ。」となむ男に問ひける。行く先多く、夜も更けにければ、鬼ある所とも知らで、神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる倉に、女をば奥に押し入れて、男、弓・胡籥を負ひて戸口にをり。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>はや夜も明けなむと思ひつつあたりけるに、 鬼はや一口に食ひてけり。 「あなや。」 と言ひけれど、神鳴る騒ぎに、え聞かざりけり。 やうやう夜も明けゆくに、見れば率て来し女も なし。足ずりをして泣けども、かひなし。</p> <p>白玉か何ぞと人の問ひし時 露と答へて消えなましものを</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p data-bbox="622 272 719 304">東下り</p> <p data-bbox="331 368 1043 692">昔、男ありけり。その男、身をえうなきものに思ひなして、京にはあらし、東の方に住むべき国求めに。」とて行きけり。もとより友とする人、一人二人して行きけり。道知れる人もなくて、惑ひ行きけり。三河の国八橋といふ所に至りぬ。そこを八橋と言ひけるは、水ゆく川の蜘蛛手なれば、橋を八つ渡せるによりてなむ、八橋と言ひける。</p> <p data-bbox="331 756 1043 979">その沢のほとりの木の陰に下り居て、乾飯食ひけり。その沢にかきつばたいとおもしろく咲きたり。それを見て、ある人のいはく、「かきつばた、といふ五文字を上句に据ゑて、旅の心を詠め。」と言ひければ、詠める。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>唐衣きつつなれにしつましあれば はるばるきぬる旅をしぞ思ふ と詠めりければ、みな人、乾飯の上に涙落として、ほとびにけり。</p> <p>行き行きて駿河の国に至りぬ。宇津の山に至りて、わが入らむとする道はいと暗う細きに、蔦・楓は茂り、もの心細く、すずろなるめを見ることと思ふに、修行者会ひたり。「かかる道は、いかでかいまする。」と言ふを見れば、見し人なりけり。京に、その人の御もとにとて、文書きてつく。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>駿河なるうつの山辺のうつつにも 夢にも人にあはぬなりけり 富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いと 白う降りり。</p> <p>時知らぬ山は富士の嶺いつとてか 鹿の子まだらに雪の降るらむ その山は、ここにたとへば、比叡の山を二十ば かり重ねあげたらむほどして、なりは塩尻のや うになむありける。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>なほ行き行きて、武蔵の国と下つ総の国との中にいと大きな河あり。それをすみだ川と言ふ。その川のほとりに群れ居て、思ひやれば、限りなく遠くも来にけるかなとわびあへるに、渡し守、「はや舟に乗れ。日も暮れぬ。」と言ふに、乗りて渡らむとするに、みな人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。</p> <p>さる折しも、白き鳥の嘴と脚と赤き、鴨の大ききなる、水の上に遊びつつ、魚を食ふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人見知らず。渡し守に問ひければ、「これなむ都鳥。」と言ふを聞きて、</p> <p>名にし負はばいざ言問はむ都鳥 わが思ふ人はありやしやと</p>	

本 文	現 代 語 訳
と詠めりければ、舟こぞりて泣きにけり。	

本 文	現 代 語 訳
<p data-bbox="591 256 689 288">筒井筒</p> <p data-bbox="331 355 1043 580">昔、田舎わたらひしける人の子ども、井のもとにいでて遊びけるを、大人になりければ、男も女も恥ぢかはしてありけれど、男は「この女をこそ得め。」と思ふ。女はこの男をと思ひつつ、親のあはすれども聞かでなむありける。</p> <p data-bbox="331 644 927 919">さて、この隣の男のもとより、かくなむ、 筒井筒井筒にかけしまろが丈 過ぎにけらしな妹見ざるまに 女、返し、 くらべこし振り分け髪も肩すぎぬ 君ならずしてたれか上ぐべき</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>など言ひ言ひて、つひに本意のごとくあひにけり。</p> <p>さて、年ごろ経るほどに、女、親なく、頼りなくなるまゝに、もろともにいふかひなくてあらむやはとて、河内の国、高安の郡に、行き通ふ所いできにけり。さりけれど、このもとの女、あしと思へる気色もなくて、出だしやりければ男、こと心ありてかかるにやあらむと、思ひ疑ひて、前裁の中に隠れゐて、河内へいぬる顔にて見れば、この女、いとよう化粧じて、うちながめて、</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>風吹けば沖つ白波たつた山 夜半にや君がひとり越ゆらむ とよみけるを聞きて、限りなくかなしと思ひて、 河内へもいかずなりにけり。</p> <p>まれまれかの高安に来てみれば、初めこそ心にく くもつくりけれ、今はうちとけて、手づから飯が ひ取りて、けこの器物に盛りけるを見て、心うが りて行かずなりにけり。さりければ、かの女、大 和の方を見やりて、</p> <p>君があたり見つつををらむ生駒山 雲な隠しそ雨は降るとも</p> <p>と言ひて見出だすに、からうじて、大和人、「来 む。」と言へり。喜びて待つに、たびたび過ぎぬ れば、</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>君来むと言ひし夜ごとに過ぎぬれば 頼まぬものの恋ひつつぞ経る と言ひけれど、男住まずなりにけり。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p data-bbox="622 260 719 292">万葉集</p> <p data-bbox="331 357 1032 437">天皇、蒲生野に遊獵し給ひし時に、額田王の作りし歌</p> <p data-bbox="331 453 808 533">あかねさす紫野行き標野行き 野守は見ずや君が袖振る</p> <p data-bbox="331 692 1032 820">皇太子の答へし御歌 紫草のにほへる妹を憎くあらば人妻ゆゑに あれ恋ひめやも</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>柿本朝臣人麻呂の、妻死して後に泣血哀慟して作りし歌 去年見てし秋の月夜は照らせども相見し妹はいや年さかる</p> <p>山部宿禰赤人の、不尽山を望みし歌 天地の 分れし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河なる 布土の高嶺を 天の原 振りさけ見れば 渡る日の 影も隠らひ 照る月の 光も見えず 白雲も い行きはばかり 時じくぞ 雪は降りける 語り継ぎ 言ひ継ぎ行かむ 不尽の高嶺は</p> <p>反歌 田子の浦ゆうち出でて見れば真白にぞ不尽の高嶺に雪は降りける</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>山上憶良、宴をまかる歌一首 憶良らは今はまからむ子泣くらむそれその母も我 をまつらむそ</p> <p>大宰帥大伴卿、酒をほめし歌 駿なきものを思はずは一坏の濁れる酒を飲むべく あるらし</p> <p>東歌 多摩川に曝す手作りさらさらに何そこの児 のここだかなしき</p> <p>二十五日に作りし歌 うらうらに照れる春日に雲雀あがり情悲し も独りし思へば 春日遅々としてうぐひす正に啼く。せいちうの意、歌に 非ざれば撥ひ難きのみ。この歌を作り、締緒を展べき。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>防人の歌 父母が頭かき撫で幸くあれていひし言葉ぜ 忘れかねつる</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p data-bbox="589 260 752 292">古今和歌集</p> <p data-bbox="331 357 1043 485">春立ちける日、よめる 袖ひちて結びし水の氷れるを春立つ今日の風や解 くらむ</p> <p data-bbox="331 549 1034 628">題知らず 五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする</p> <p data-bbox="331 740 1043 868">是貞親王の家の歌合の歌 山里は秋こそことにわびしけれ鹿の鳴くねに目を 覚ましつつ</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>雪の降りけるを見てよめる 雪降れば木毎に花ぞ咲きにけるいづれを梅と分きて折らまし</p> <p>題知らず うたたねに恋しき人を見てしより夢てふものは頼みそめてき</p> <p>物思ひけるころ、ものへまかりける道に野火の燃えけるを見てよめる 冬枯れの野辺と我が身を思ひせばもえても春を待たましものを</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>題知らず おほかたは月をもめでじこれぞこの積もれば人の 老いとなるもの</p> <p>山の法師のもとへつかはしける 世を捨てて山に入る人山にてもなほ憂き時はいつ ち行くらむ</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p data-bbox="555 256 752 292">新古今和歌集</p> <p data-bbox="331 304 1043 485">男ども、詩を作りて、歌に合はせはべりしに、「水の春望」といふことを 見わたせば山もとかすむ水無瀬川夕べは秋となに 思ひけん</p> <p data-bbox="331 644 1043 775">入道前関白、右大臣に侍りける時、百首歌よませ はべりける、ほととぎすの歌 昔思ふ草の庵の夜の雨に涙な添へそ山ほととぎす</p> <p data-bbox="331 884 1043 1015">百首歌奉りし、秋の歌 桐の葉も踏み分けがたくなりにはけり必ず人を待つ となけれど</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>百首歌たてまつりし時 駒とめて袖うちはらふかげもなし佐野のわたりの 雪の夕暮れ</p> <p>五十首の歌奉りし時 明けばまた越ゆべき山の嶺なれや空ゆく月の末 の白雲</p> <p>水無瀬恋十五首歌合に、春の恋の心を おもかげの霞める月ぞ宿りける春や昔の袖の涙 に</p> <p>東の方へ修行しはべりける、富士の山をよめる 風になびく富士の煙の空に消えて行方も知らぬ我 が思ひかな</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p data-bbox="589 260 752 341">平家物語 木曾の最期</p> <p data-bbox="331 405 1039 774">木曾は長坂を経て丹波路へおもむくとも聞こえけり。また竜花越にかかつて北国へとも聞こえけり。かかりしかども、今井が行方を聞かばやとて、勢田の方へ落ちゆくほどに、今井四郎兼平も、八百余騎で勢田を固めたりけるが、わづかに五十騎ばかりに討ちなされ、旗をば巻かせて、主のおぼつかなきに、都へ取つて返すほどに、大津の打出の浜にて、木曾殿に行き合ひ奉る。</p> <p data-bbox="331 837 1039 967">互ひになか一町ばかりよりそれと見知つて、主従、駒を速めて寄り合うたり。木曾殿、今井が手を取つてのたまひけるは、</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>「義仲、六条河原でいかにもなるべかりつれども、なんぢが行方の恋しさに、多くの敵の中を駆け割つて、これまでは逃れたるなり。」 今井四郎、 「御淀まことにかたじけなう候ふ。兼平も勢田で討死つかまつるべう候ひつれども、御行方のおぼつかなさに、これまで参つて候ふ。」 とそ申しける。木曾殿、 「契りはいまだ朽ちせざりけり、義仲が勢は敵に押し隔てられ、山林に馳せ散つて、この辺にもあるらんぞ。なんぢが巻かせて持たせたる旗、揚げさせよ。」</p> <p>とのたまへば、今井が旗をさし揚げたり。京より落つる勢ともなく、勢田より落つる者ともなく、今井が旗を見つけて、三百余騎ぞ馳せ集まる。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>木曾、大きに喜びて、 「この勢あらば、などか最後のいくさせざるべき。 ここにしぐらうて見ゆるは、誰が手やらん。」 「甲斐の一条次郎殿とこそ承り候へ」 「勢はいくらほどあるやらん。」 「六千余騎とこそ聞こえ候へ。」 「さては、よい敵ごさんなれ。同じう死なば、よ からう敵に駆け合うて、大勢の中でこそ討死をも せめ。」 とて、真つ先にこそ進みけれ。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>木曾三百余騎、六千余騎が中を、縦様・横様・蜘蛛手・十字に駆け割つて、後ろへつつと出でたれば、五十騎ばかりになりけり。そこを破つて行くほどに、土肥次郎実平、二千余騎でささへたり。それをも破つて行くほどに、あそこでは四、五百騎、ここでは二、三百騎、百四、五十騎、百騎ばかりが中を駆け割り駆け割り行くほどに、主従五騎にぞなりにける。五騎がうちまで巴は討たれざりけり。</p> <p>木曾殿、「おのれはとうとう、女なれば、いつちへも行け。われは討ち死にせんと思ふなり。もし人手にかからば自害をせんずれば、木曾殿の最後のいくさに女を具せられたりけりなど言はれんことも、しかるべからず」</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>とのたまひけれども、なほ落ちも行かざりけるが、あまりに言はれたてまつりて、「あつぱれ、よからう敵がな。最後のいくさして見せ奉らん」とて、控へたるところに、武蔵国に聞こえたる大力、御田八郎師重、三十騎ばかりで出で来たり。</p> <p>巴、その中へ駆け入り、御田八郎に押し並べて、むずと取つて引き落とし、わが乗つたる鞍の前輪に押しつけて、ちつとも動かさず、首ねぢ切つて捨ててんげり。そののち物の具脱ぎ捨て、東国の方へ落ちぞ行く。手塚太郎討ち死にす。手塚別当落ちにけり。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>今井四郎、木曾殿、ただ主従二騎になつて、のたまひけるは、「日ごろは何ともおぼえぬ鎧が、今日は重うなつたるぞや」。今井四郎申しけるは、「御身もいまだ疲れさせたまはず。御馬も弱り候はず。何によつてか一領の御着背長を重うはおぼしめし候ふべき。それは御方に御勢が候はねば、臆病でこそ、さはおぼしめし候へ。</p> <p>兼平一人候ふとも、余の武者千騎とおぼしめせ。矢七つ八つ候へば、しばらく防ぎ矢つかまつらん。あれに見え候ふ、粟津の松原と申す。あの松の中で御自害候へ」</p> <p>とて、打つて行くほどに、また新手の武者五十騎ばかり出で来たり。「君はあの松原へ入らせたまへ。兼平はこのかたき防ぎ候はん」と申しければ、</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>木曾殿のたまひけるは、 「義仲、都にていかにもなるべかりつるが、これまで逃れ来るは、汝と一所で死なんと思ふためなり。所々で討たれんよりも、一所でこそ討死をもせめ」とて、馬の鼻を並べて駆けんとしたまへば、今井四郎、馬より飛び降り、主の馬の口に取りついて申しけるは、「弓矢取りは、年ごろ日ごろいかなる高名候へども、最後の時不覚しつれば、長き疵にて候ふなり。</p> <p>御身は疲れさせたまひて候ふ。続く勢は候はず。かたきに押し隔てられ、言ふかひなき人の郎等に組み落とされさせたまひて、討たれさせたまひなば、 『さばかり日本国に聞こえさせたまひつる木曾殿をば、それがしが郎等の討ちたてまつたる』 なんと申さんことこそ口惜しう候へ。ただあの松原へ入らせたまへ」</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>と申しければ、木曾、「さらば」とて、粟津の松原へぞ駆けたまふ。</p> <p>今井四郎ただ一騎、五十騎ばかりが中へ駆け入り、鎧踏んばり立ち上がり、大音声あげて名のりけるは、</p> <p>「日ごろは音にも聞きつらん、今は目にも見たまへ。木曾殿の御乳母子、今井四郎兼平、生年三十三にまかりなる。さる者ありとは鎌倉殿までも知ろし召されたるらんぞ。兼平討つて見参に入れよ」とて、射残したる八筋の矢を、差しつめ引きつめ、さんざんに射る。死生は知らず、やにはに敵八騎射落とす。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>そののち、打ち物抜いてあれに馳せ合ひ、これに馳せ合ひ、切つて回るに、面を合はする者ぞなき。分捕りあまたしたりけり。ただ、「射取れや。」とて、中に取りこめ、雨の降るやうに射けれども、鎧よければ裏かかず、あき間を射ねば手も負はず。</p> <p>木曾殿はただ一騎、栗津の松原へ駆けたまふが、正月二十一日、入相ばかりのことなるに、薄氷は張つたりけり。深田ありとも知らずして、馬をざつと打ち入れたれば、馬のかしらも見えざりけり。あふれどもあふれども、打てども打てども働かず。今井が行方のおぼつかなさに、振り仰ぎたまへる内甲を、三浦の石田次郎為久、追つかかつて、よつ引いて、ひやうふつと射る。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>痛手なれば、真甲を馬のかしらに当ててうつぶしたまへるところに、石田が郎等二人落ち合うて、つひに木曾殿の首をば取つてんげり。太刀の先に貫き、高くさし上げ、大音声をあげて、</p> <p>「この日ごろ日本国に聞こえさせたまひつる木曾殿をば、三浦の石田次郎為久が討ち奉りたるぞや。」</p> <p>と名のりければ、今井四郎、いくさしけるが、これを聞き、「今は誰をかばはんとてか、いくさをもすべき。これを見たまへ、東国の殿ばら。日本一の剛の者の自害する手本」とて、太刀の先を口に含み、馬よりさかさまに飛び落ち、貫かつてぞ失せにける。</p> <p>さてこそ粟津のいくさはなかりけれ。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p data-bbox="600 236 734 335">参 考 祇園精舎</p> <p data-bbox="344 422 1021 702">祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。猛き者もつひには滅びぬ、ひとへに風の前の塵に同じ。</p> <p data-bbox="344 790 1028 1010">遠く異朝をとぶらへば、秦の趙高、漢の王莽、梁の朱异、唐の禄山、これらはみな、旧主先皇の政にも従はず、楽しみをきはめ、諫めをも思ひ入れず、天下の乱れんことを悟らずして、</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p data-bbox="349 236 1021 331">民間の愁ふる所を知らざつしかば、久しからずして、亡じにし者どもなり。</p> <p data-bbox="349 424 1021 762">近く本朝をうかがふに、承平の将門、天慶の純友、康和の義親、平治の信頼、これらはおごれる心も猛きことも、みなとりどりにこそありしかども、ま近くは六波羅の入道前太政大臣平朝臣清盛公と申しし人のありさま、伝へ承るこそ、心も言葉も及ばれね。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p data-bbox="591 225 781 304">土佐日記 馬のはなむけ</p> <p data-bbox="331 368 1041 544">男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。その年の、十二月の二十日余り行一日の日の、戌の時に門出す。そのよし、いささかにものに書きつく。</p> <p data-bbox="331 608 1041 879">ある人、県の四年五年果てて、例のことどもみなし終へて、解由などとりて、住む館より出でて、舟に乗るべき所へわたる。かれこれ、知る知らぬ、送りす。年ごろよくくらべつる人々なむ、別れがたく思ひて、日しきりに、とかくしつつののしるうちに、夜ふけぬ。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>二十二日に、和泉の国までと、平らかに願立つ。 藤原のときざね、舟路なれど、むまのはなむけす。 上・中・下、酔ひ飽きて、いとあやしく、潮海の ほとりにてあざれあへり。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p data-bbox="647 225 719 256">帰京</p> <p data-bbox="331 320 1043 499">京に入り立ちてうれし。家に至りて、門に入るに、月明ければ、いとよくありさま見ゆ。聞きしよりもまして、言ふかひなくぞこぼれ破れたる。家に預けたりつる人の心も、荒れたるなりけり。</p> <p data-bbox="331 560 1043 786">「中垣こそあれ、一つ家のやうなれば、望みて預かれるなり。」「さるは、たよりごとに物も絶えず得させたり。」「今宵、かかること。」と、声高なものも言はせず。いとはつらく見ゆれど、こころざしはせむとす。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>さて、池めいてくぼまり、水つける所あり。ほとりに松もありき。五年六年のうちに、千年や過ぎにけむ、かたへはなくなりけり。今生ひたるぞ混じれる。おほかたの、みな荒れにたれば、「あはれ。」とぞ人々言ふ。</p> <p>思ひ出でぬことなく、思ひ恋しきがうちに、この家にて生まれし女子の、もろともに帰らねば、いかがは悲しき。船人もみな、子たかりてののしる。かかるうちに、なほ悲しきに堪へずして、ひそかに心知れる人と言へりける歌、</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>生まれしも帰らぬものを わが宿に小松のあるを 見るが悲しさ とぞ言へる。なほ飽かずやあらむ、またかくなむ、 見し人の松の千年に見ましかば 遠く悲しき別れせましや</p> <p>忘れがたく、口惜しきこと多かれど、え尽くさ ず。とまれかうまれ、とく破りてむ。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p data-bbox="584 225 770 308">奥の細道 漂泊の思ひ</p> <p data-bbox="349 384 1025 847">月日は百代の過客にして行きかふ年も また旅人なり。舟の上に生涯を浮かべ、馬 の口をとらへて老いを迎ふる者は、日々旅 にして、旅を栖とす。古人も多く旅に死せ るあり。予も、いづれの年よりか、片雲の 風に誘はれて、漂泊の思ひやまず、海浜に さすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の 古巣を払ひて、やや年も暮れ、</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>春立てる霞の空に、白河の関越えんと、 そぞろ神の物につきて心を狂はせ、道祖神 の招きにあひて取るもの手につかず、もも ひきの破れをつづり、笠の緒つけ替へて、 三里に灸据うるより、松島の月まづ心にか かりて、住める方は人に譲り、杉風が別荘 に移るに、 草の戸も 住み替はる代ぞ 雛の家 表八句を庵の柱に掛けおく。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>弥生も末の七日、あけぼのの空瓏々として、月は有明にて光をさまれるものから、富士の峰かすかに見えて、上野・谷中の花の梢またいつかはと心細し。むつまじきかぎりには宵よりつどひて、舟に乗りて送る。千住といふ所にて舟を上がれば、前途千里の思ひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の涙をそそぐ。</p> <p>行く春や 鳥啼き 魚の目は涙</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>これを矢立の初めとして、行く道なほ進まず。人々は途中に立ち並びて、後ろ影の見ゆる間ではと、見送るなるべし。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p data-bbox="638 225 712 256">平泉</p> <p data-bbox="349 320 1021 687">三代の栄耀一睡のうちにして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて、金鷄山のみ形を残す。まづ高館に登れば、北上川、南部より流るる大河なり。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落ち入る。泰衡らが旧跡は、衣が関を隔てて南部口をさし固め、えぞを防ぐと見えたり。</p> <p data-bbox="349 751 1021 975">さても、義臣すぐつてこの城にこもり、巧名一時の草むらとなる。「国破れて山河あり、城春にして草青みたり。」と、笠うち敷きて、時の移るまで涙を落としはべりぬ。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>夏草や つはものどもが 夢の跡</p> <p>卯の花に 兼房見ゆる 白毛かな 曾良</p> <p>かねて耳驚かしたる二堂開帳す。経堂は三将の像を残し、光堂は三代の棺を納め、三尊の仏を安置す。七宝散りうせて、珠の扉風に破れ、金の柱霜雪に朽ちて、すでに頽廢空虚の草むらとなるべきを、四面新たに囲みて、藎を覆うて風雨をしのぐ。しばらく千歳のかたみとはなれり。</p>	

本 文	現 代 語 訳
五月雨の 降り残しや 光堂	

本 文	現 代 語 訳
<p data-bbox="638 225 745 256">立石寺</p> <p data-bbox="349 336 1025 799">山形領に立石寺といふ山寺あり。慈覚大師の開基にして、殊に清閑の地なり。一見すべきよし、人々のすすむるによつて、尾花沢よりとつて返し、その間七里ばかりなり。日いまだ暮れず。ふもとの坊に宿借り置きて、山上の堂に登る。岩に巖を重ねて山とし、松柏年ふり、土石老いて苔滑かに、岩上の院々とびらを閉ぢて物の音聞えず。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>岸をめぐり、岩をはひて仏閣を拝し、佳 景寂寞として心澄み行くのみおぼゆ。 閑かさや 岩にしみ入る 蟬の声</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p data-bbox="645 212 719 244">大垣</p> <p data-bbox="331 308 1043 679">露通もこの港まで出で迎ひて、美濃国へと伴ふ。駒に助けられて大垣の庄に入れば、曾良も伊勢より来たり合ひ、越人も馬を飛ばせて、如行が家に入り集まる。前川子、荊口父子、その外親しき人々、日夜訪ひて、蘇生の者に会ふがごとく、かつ喜びかついたはる。旅のものうさもいまだやまざるに、長月六日になれば、伊勢の遷宮拝まんと、また舟に乗りて、</p> <p data-bbox="427 743 815 775">蛤のふたみに別れ行く秋ぞ</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p data-bbox="647 212 719 245">訓点</p> <p data-bbox="331 309 479 343">青雲の志。</p> <p data-bbox="331 406 732 440">柳は暗く、花は明らかなり。</p> <p data-bbox="331 504 479 537">書を読む。</p> <p data-bbox="331 601 636 635">備へ有れば患ひ無し。</p> <p data-bbox="331 699 573 732">眼光紙背に徹す。</p> <p data-bbox="331 796 860 829">良薬は口に苦けれども、病に利あり。</p> <p data-bbox="331 940 987 973">君子は言に訥にして、行ひに敏ならんと欲す。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p data-bbox="622 212 752 244">再読文字</p> <p data-bbox="331 308 831 339">過ぎたるは猶ほ及ばざるがごとし。</p> <p data-bbox="331 403 927 435">人の將に死せんとするや、其の言や善し。</p> <p data-bbox="331 499 1021 531">人を用ゐるには宜しく其の長ずる所を取るべし。</p> <p data-bbox="331 595 1043 627">至誠にして動かざる者は、未だ之れ有らざるなり。</p> <p data-bbox="331 691 1021 722">時に及んで当に勉励すべし。歳月は人を待たず。</p> <p data-bbox="331 786 1043 866">病癒ゆれば多く慎みを忘る。須らく病苦の時を思ふべし。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p data-bbox="622 212 752 293">故 事 矛盾</p> <p data-bbox="338 357 1043 536">楚人に盾と矛とを鬻ぐ者有り。之を誉めて曰はく、「吾が盾の堅きこと、能く陥すもの莫きなり。」と。又其の矛を誉めて曰はく、「吾が矛の利きこと、物に於いて陥さざること無きなり。」と。</p> <p data-bbox="338 596 1043 678">或ひと曰はく、「子の矛を以つて、子の盾を陥さば、何如。」と。其の人応ふる能はざるなり。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p data-bbox="645 212 725 248">推敲</p> <p data-bbox="331 309 1039 632">賈島拳に赴きて京に至り、驢に騎りて詩を賦して、「僧は推す月下の門」の句を得たり。推すを改めて敲くと作さんと欲し、手を引きて推敲の勢を作すも、未だ決せず。覚えずして大尹韓愈に衝たる。乃ち具さに言うに、愈曰はく、敲くの字佳しと。遂に轡を並べて詩を論ずること之を久しくす。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p data-bbox="622 225 719 256">借虎威</p> <p data-bbox="331 320 1043 643">虎百獣を求めて之を食らひ、狐を得たり。狐曰はく、「子敢へて我を食らふこと無かれ。天帝我をして百獣に長たらしむ。今子我を食らはば、是れ天帝の命に逆らふなり。子我を以って信ならずと為さば、吾子の為に先行せん。子我が後に随ひて観よ。百獣の我を見て、敢へて走げざらんや。」と。虎以って然りと為す。故に遂に之と行く。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p data-bbox="645 212 719 245">唐詩</p> <p data-bbox="331 260 524 293">鶴鵲楼に登る</p> <p data-bbox="331 308 651 341">白日 山に依りて尽き</p> <p data-bbox="331 355 651 389">黄河 海に入りて流る</p> <p data-bbox="331 403 651 437">千里の目を窮めんと欲</p> <p data-bbox="331 451 651 485">さらに上る 一層の楼</p> <p data-bbox="331 547 398 580">絶句</p> <p data-bbox="331 595 613 628">江碧にして鳥途白く</p> <p data-bbox="331 643 712 676">山青くして花然えんと欲す</p> <p data-bbox="331 691 555 724">今春看又た過ぐ</p> <p data-bbox="331 738 712 772">何れの日か是れ帰年ならん</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>雑詩 君故郷より来たる 応に故郷の事を知るべし 来日椅窗の前 寒梅花を著けしや未だしや</p> <p>江雪 千山鳥飛ぶこと絶え 万径人蹤滅す 孤舟蓑笠の翁 独り釣る寒江の雪</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>涼州詩 黄河遠く上る白雲の聞 一片の孤城万ジンの山 羌笛何ぞ須ひん楊柳を怨むを 春光度らず玉門関</p> <p>黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る 故人西のかた黄鶴楼を辞し 煙花三月揚州に下る 孤帆の遠影碧空に尽き 唯だ見る長江の天際に流るるを</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>友人を送る 青山北郭に 横たわり 白水 東城をめぐる この地 一たび別れをなし 孤蓬 万里にゆく 浮雲 遊子の意 落日 故人の情 手をふるひて ここより去れば 肅肅として班馬鳴く</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>旅夜懐ひを書す 細草微風の岸 危檣独夜の舟 星垂れて平野闊く 月湧きて大江流る 名は豈に文章もて著れんや 官は応に老病にて休むべし 飄飄何の似る所ぞ 天地の一沙鷗</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p data-bbox="651 212 719 244">雑説</p> <p data-bbox="331 308 1043 531">世に伯楽有りて、然る後に千里の馬有り。 千里の馬は常に有れども、伯楽は常には有らず。 故に名馬有りと雖ども、祇だ奴隸人の手に辱められ、槽櫪の間に駢死し、千里を以て称せられざるなり。</p> <p data-bbox="331 595 1043 722">馬の千里なる者は、一食に或いは粟一石を尽くす。 馬を食ふ者は其の能く千里なるを知りて食はざるなり。</p> <p data-bbox="331 786 1043 962">是の馬や、千里の能有りと雖ども、食飽かざれば、力足らず、才の美外に見れず。 且つ常の馬と等しからんと欲するも、得べからず。 安くんぞ其の能の千里なるを求めんや。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>之を策つに其の道を以てせず、之を食ふに其の材を尽くさしむる能はず。之に鳴けども其の意に通ずる能はず。策を執りて之に臨みて曰はく、「天下に馬無し。」と。</p> <p>鳴呼、其れ真に馬無きか。其れ真に馬を知らざるか。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p data-bbox="622 272 752 304">臥薪嘗胆</p> <p data-bbox="331 368 1041 496">呉王闔廬伍員を挙げて国事を謀らしむ。員字は子胥。楚人伍奢の子なり。奢誅せられて呉に奔り、呉の兵を以りて郢に入る。</p> <p data-bbox="331 512 1041 735">呉越を伐ち、闔廬傷つきて死す。子の夫差立つ。子胥復た之に事ふ。夫差讎を復せんと志し、朝夕薪中に臥し、出入するに人をして呼ばしめて曰はく、「夫差、而越人の而の父を殺せるを忘れたるか」と。</p> <p data-bbox="331 799 1041 1023">周の敬王の二十六年、夫差越を夫椒に敗る。越王句踐、余兵を以りて会稽山に棲み、臣と為り、妻は妾と為らんと請ふ。子胥言ふ、「不可なり。」と。太宰伯嚭越の賂を受け、夫差に説きて越を赦さしむ。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>勾踐国に反り、胆を坐臥に懸け、即ち胆を仰ぎ之を嘗めて曰はく、「女会稽の恥を忘れたるか。」と。国政を挙げて大夫種に属し、而して范蠡と兵を治め、呉を謀るを事とす。</p> <p>太宰嚭子胥謀の用みられざるを恥ぢて怨望すと譖す。夫差乃ち子胥に属鏤の劍を賜ふ。子胥其の家人に告げて曰はく、「必ず吾が墓に槨を樹ゑよ。槨は材とすべきなり。吾が目を抉りて、東門に懸けよ。以つて越兵の呉を滅ぼすを觀ん。」と。乃ち自頸す。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>夫差其の尸を取り、盛るに鴟夷を以つし、之を江に投ず。呉人之を憐れみ、祠を江上に立て、命けて胥山と曰ふ。</p> <p>越、十年生聚し、十年教訓す。周の元王の四年、越呉を伐つ。呉三たび戦ひ三たび北ぐ。夫差姑蘇に上り、亦成を越に請ふ。范蠡可かず。夫差曰はく、「吾以って子胥を見る無し。」と。幘冒を為りて乃ち死す。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p data-bbox="622 212 752 244">鶏鳴狗盗</p> <p data-bbox="331 308 1037 579">靖郭君田嬰なる者は、齊の宣王の庶弟なり。薛に封ぜらる。子有り文と曰ふ。食客数千人。名声諸侯に聞こゆ。号して孟嘗君と為す。秦の昭王、其の賢を聞き、乃ち先づ質を齊に納れ、以見んことを求む。至れば則ち止め、囚へて之を殺さんと欲す。</p> <p data-bbox="331 643 1037 914">孟嘗君人をして昭王の幸姫に抵り解かんことを求めしむ。姫曰はく、「願はくは君の狐白裘を得ん。」と。蓋し孟嘗君、嘗て以て昭王に献じ、他の裘無し。客に能く狗盗を為す者有り。秦の蔵中に入り、裘を取りて姫に献ず。姫為に言ひて釈さるるを得たり。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>即ち馳せ去り、姓名を変じ夜半に函谷関に至る。関の法、鶏鳴きて方に客を出だす。秦王の後に悔いて之を追はんことを恐る。客に能く鶏鳴を為す者有り。鶏尽く鳴く。遂に伝を発す。出でて食頃にして、追う者果たして至るも及ばず。孟嘗君、歸りて秦を怨み、韓・魏と之を伐ち函谷関に入る。秦城を割きて以て和す。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p data-bbox="651 212 719 244">論語</p> <p data-bbox="331 308 1041 488">子曰はく、「学びて時にこれを習ふ、亦た説ばしからずや。朋あり、遠方より来たる、亦た楽しからずや。人知らずして饁みず、亦た君子ならずや。」と。</p> <p data-bbox="331 552 1041 732">子曰はく、「吾れ十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑はず。五十にして天命を知る。六十にして耳順がふ。七十にして心の欲する所に従ひて、矩を踰えず。」と。</p> <p data-bbox="331 836 1041 924">子川上に在りて曰はく、「逝く者は斯くの如きか。昼夜を舎かず。」と。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>廩焚けたり。子朝より退きて曰はく、「人を傷へりや。」と。 馬を問はず。</p> <p>子貢政を問ふ。子曰はく、「食を足らし、兵を足らし、民は之を信にす。」と。</p> <p>子貢曰はく「必ず已むを得ずして去らば、斯の三者に於いて、何をか先にせん。」と。</p> <p>曰はく、「兵を去らん。」と。</p> <p>子貢曰はく、「必ず已むを得ずして去らば、斯の二者に於いて、何をか先にせん。」と。</p> <p>曰はく、「食を去らん。古より皆死有り。民に信無くんば、立たず。」と。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>季康子政を孔子に問ふ。 孔子対へて曰はく、 「政は正なり。 子帥ゐるに正を以つてせば、孰 か敢へて正しからざらん。」と。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p data-bbox="645 212 719 245">孟子</p> <p data-bbox="331 309 1037 440">孟子梁の恵王に見ゆ。励王曰はく、「叟千里を遠しとせずして来たる。亦将に以つて吾が国を利する有らんとするか。」と。</p> <p data-bbox="331 501 1037 727">孟子対へて曰はく、「王何ぞ必ずしも利と日はん。亦仁義有るのみ。王は何を以つて吾が国を利せんと日ひ、大夫は何を以つて吾が家を利せんと日ひ、士庶人は何を以つて吾が身を利せんと日ひ、上下交利を征れば国危ふし。</p>	

本 文	現 代 語 訳
<p>万乗の国、其の君を弑する者は、必ず千乗の家なり。千乗の国、其の君を弑する者は、必ず百乗の家なり。</p> <p>方に千を取り、千に百を取るは、多からずと為さず。苟くも義を後にして利を先にするを為さば、奪はずんば黷かず。未だ仁にして其の親を遺つる者有らざるなり。未だ義にして其の君を後にする者有らざるなり。王亦仁義と曰はんのみ。何ぞ必ずしも利と曰はん。」と。</p>	